

飼養法

〔和漢三才圖會鳥之四十四〕養小鳥

凡小鳥穀未能啄餌者先取小蟲哺之、子及黑小蜘蛛最佳、而後用研餌、如畫眉鳥、四十雀等用粟稗育者不及研餌其研餌造法、忌鼠屎及鹽、誤入用則死、

糗ハツク九兩ク朱春米ク一兩ク炒ゴ小鯽ハツク鱸ハツク亦佳、謂之魚餌、各細末和調、蕪菜或芹葉入研合、令色淡青、水煉用

如鶯、駒鳥、鷓鴣者、用魚餌六兩亦佳、最隨時宜、晴天令鳥浴水、可以避羽蟲、浴後中於日、暑則三日

一度寒則十日一度、四五月有鳥膨脹、謂豆和留急用番椒浸水令吞之、如無効、取常山木蟲餌之、蜈蚣亦

佳、有鳥脛脚生小瘡、謂阿之介徐刮去、癰瘡令吞番椒水則治、緩則舉家鳥皆傳染至死、若糞閉者吞番椒

水可也、病鶯不食餌者、安于廁中則乍愈、鳩飛不還者、燒奇楠於樊中則遠慕香氣歸來、其所喜淨不

淨不可得曉、七八月之際、諸鳥羽毛漸脫、易謂之ケカユル、音安、訓介毛落更生、整理曰音先毳、鳥無所以

而有卒死、急拔頸毛二三條、如人之身、柱之穴處跡灸一壯則活、

〔諸禽萬益集序〕此書たるや、諸鳥を飼の秘をあらはし、まさに死せざるの神を知らしむ、けだし鳥をそだつることは飼のかげん、且水と虫とのかいやう、其時に隨ひ應變するにあり、然るに其應

變は寒中は鳥を内に置いて、風雨雪霜の寒を去のぎ、暑中は鳥を涼しきに置いて、その暑をいとひ、若

性氣おとろふるときは、あるひはむしあるひは卵を飼て、其性を養ひ、其性のよはきものには、つ

よきをゑがひ、其性のつよきものには、よはきをゑがふ、常に籠をあらひぬぐひて、其羽のよこれ

腐るをいとふなり、鳥の命數凡十有餘年なり、まさに是を飼えざれば、かはざるに去かず、まさに

是をかひえて、其死せざるの神を去れば、飼て可なり、是をかへども死せざるの妙を去らざる、是

をかひえざるものといふべし、飼て死せざるの妙を去る、是をかひ得るものといふ、予馬介左童稚

の頃より數万の鳥をかひ、一月に死する鳥いく百千といふことを去らず、遂に其死すべからざ

るをしる、予おもふに、性あるもの、死をよろこぶものなし、何ぞこれを樂しむに、死をたのしむこ